

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2016 葛西康德

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



『オデュッセイア』を読む ヒュブリス！ どっちが？

葛西康德

(文学部西洋古典学)

2016年度学術俯瞰講義 第三回

2016年4月20日



Berlin, Antikensammlung



Courtesy of Professor François Lissarrague



"Odysseus, Athena, and Nausicaa"
Creator: Marco Prins
Museum: Munich, Antikensammlung
<http://www.livius.org/pictures/a/greek-art/odysseus-and-nausicaa/>
CC BY-NC-SA 4.0



Berlin, Antikensammlung

今度は次にオデュセウスを見て老人はまた問い質すよう、「ではあの男、いとしい娘よ、あそこに居るのは一体誰か教えてくれ、背丈はいささかアトレウスの子アガ멤ノーンに劣りはするが、両肩の幅、また胸のあたりは、見るからにひとときわ広く、鎧甲は数多の人を養い育てる大地の上に横たえたまま、自身は牡羊のようにつわものどもの陣のならびを閲べてあるく。いかさま彼を、毛のびっしりと生い固まった羊にも、私としたりあえてみよう、銀白色の牝羊の大きな群のまん中をわけて歩いてゆくのに。」

そのとき彼にゼウスから生まれた娘ヘレネーは答えていうよう、「あの者こそまたラーエルテースの子の、智恵にゆたかなオデュセウスとて、嵯峨とした岩山ながらイタケーの郷に生い立ちまして、ありとある企みいつわり、また抜目ない思慮を心得た者にございます。」

『イリアス』第三巻 191～202

ホメーロス『イリアス(上)』呉茂一訳、平凡社ライブラリー、2003年、pp.122-123

それに対して今度は、分別に長けたアンテーノールがいう
ようには、「奥方、いかにもまったく間違いなしにあなたのい
われた言葉のとおりだ。というのは以前此の処へもとうとい
オデュッセウスは来たことがある、あなたのことで使節の役
目に、軍神の伴なるメネラーオスとうち連れだって。その
人々を宿主として私はもてなし、館に迎えて愛想をつくし、
その二人のなりかたちや抜目ない思慮に親しく接した。そ
れでいかさま、寄り集まった多勢のトロイエー人と入り交わ
ると、立っている折は、メネラーオスが肩幅のひろさでは他
に超えたが、二人ながら坐った折には、オデュッセウスのほう
が立派であった。

(203～224)-1

ホメーロス『イーリアス(上)』呉茂一訳、平凡社ライブラリー、2003年、p.123

ところでいよいよ、みなにむかって話をしたり、思慮を廻らす段になると、いかさまメネラーオスのほうはすらすら早口に喋っていった、言葉すくなではあるが、ごく朗々とな、口数が多いとではないけれど、不確かに言いまどいなど決してせなんだ、なるほど年齢は下であったが。しかしいよいよ智恵にゆたかなオデュッセウスが突っ立ち上ると、立っているまま、下眼づかいに、地べたのほうへ眼を釘付けにし、笏杖をけして、後ろの方だの面前だのへ振りまわしもせず、しっかと握りしめた態は智恵の足りない人間みたいで、ひどく機嫌を悪くしてるか、生まれつきの愚か者とも思われかねない、

(203～224)-2

ホメーロス『イーリアス(上)』呉茂一訳、平凡社ライブラリー、2003年、pp.123-124

それがいよいよ大音声を胸の中から放つとなると、そして文句を冬の日の吹雪のように吐き散らすおり、その折にはもう誰一人人間の身で、オデュセウスに対抗できる者はなからう。〔その時にはもう我々としてこのオデュセウスの態を見ても訝しまなかった。〕」

『イリアス』第三巻 203～224

「ご老人よ、遠方の者ではありませんせぬ、その人物は、すぐ御自身が御覧でしょう。市民らと呼ばひ集めたのは、この私、というのも大した難儀が身にふりかかりまして、格別それは来襲する軍隊の報せを聞いた訳ではなく、———もしいち早く聞き込んだら、すぐ皆さん方に報せましようけど、———また格別何か国全体に関することを、報告するとか論じようとか申すのでもありません、でも私にとっては大切なこと、とは災難が私の家を襲ったので、それも二重に、その一つは立派な親父を失したことで、以前は父が、ここにおいでの方を、領主として親同然に優しく世話した、

(40-79)-1

ホメーロス『オデュッセイアー(上)』呉茂一訳、岩波文庫、1971年、pp.40-41

さていま一つは、いっそう大きな災禍で、すぐにもまったく家をすっかり潰しかねません、生活もまるで立たなくして。母のところには求婚者たちが押しかけて攻め立てるのです、その気もないのに。その人たちは、土地でも特に身分のある方々の息子ですけど、(祖)父イーカリオスの館へ往くのは、とても怖くて、まっぴらなのです、祖父でしたらば、自分で娘の嫁入り話も決めるでしょうし、自分の意中の人物へなり、気にいっている男へなり、嫁けましょうが。それで彼らは、私の家へ毎日毎日やって来ましては、牛どもだの羊だの、また肥え太った山羊なんどを贅に屠って、

(40-79)-2

ホメーロス『オデュッセイアー(上)』呉茂一訳、岩波文庫、1971年、p.41

勝手に無料の馳走にあずかり、紅く燦めく酒を飲むなど、でたらめのやり放題。それでどんどん食い潰されていくというのも、以前のオデュッセウスみたように、災難から家を護れる人間が居ないためで、私どもには彼ほどな防衛力はどうていなく、よし(やったとて)、みじめな目にあうだけでしょう、武勇にならわぬ者ばかりで。もしも私にその力さえ具ってたら、きっと防いで却けましょうに。いかにもまったくこの態たらくは、もう我慢がならない、私の家財が蕩尽されてく、そのされ方まで真当ではない、あなた方自身にしる理不尽だと認められましょう、周囲に住む人たちに対してなりと恥じるが当然、

(40-79)-3

ホメーロス『オデュッセイアー(上)』呉茂一訳、岩波文庫、1971年、pp.41-42

神さま方のおん憤りも、ちっとは畏れたがよいこと、非道の所業をお咎めあって、世直しをでもはかられぬよう。どうかお願いいたします、オリュンポスなるゼウス神、また掟ての女神にかけ、———そのお方こそ、市民たちの集会を、解散させも開かせもなさるのですから、———やめて下さい、皆さん方、私をかってに、悪ましい悲嘆にひとりやつれさせておき、———もしも私のすぐれた父オデュッセウスが、万一にも悪意から、脛当もよいアカイア人らを苦しめたというのでなければ。

(40-79)-4

ホメーロス『オデュッセイアー(上)』呉茂一訳、岩波文庫、1971年、p.42

その仕返しに、あなた方もまた悪意から、この連中をそそのかして、私をいたぶるの でなければ。でも、私にしたらば、まだあなた方に、家の貯えなり家畜なりを、食い潰されたがいっそましです。食べ物に同じくされるにしろ、あなた方なら、多分はじきに勘定が貰えましょう、全部をそっくり取り立てるまで、代金をしきりにせがんで私どもが口やかましく町中ほっつき廻りましょうから。ところが今この方々は、癒やしもならぬ苦しみで私の胸を悩ますのです。」

『オデュッセイア』第二巻 40～79

「テーレマコスよ、手もつけられぬ血気に逸り、大言を吐き、何たることを口にして我々を辱しめるのだ、世人の非難を我々に負わせる積りか。だがけっして、アカイア族の求婚者たちが、君から咎められる理由は少しもない、君の母上にこそ責任がある、とてもたいした狡猾さだ。知っての通り、もう三年が経ち、じき四年目も過ぎていこう、アカイア人らの胸を騒がせ、その熱情をもてあそぶのも。誰彼といわず望みを抱かせ、どの男にも約束をしてよこすのだから。音信をわざわざ遣って来てな、真の意向は全然違っているものを。」

(85-107)-1

ホメーロス『オデュッセイアー(上)』呉茂一訳、岩波文庫、1971年、p.43

母上はつまりこうした奸計まで、心の底で企んでいたのだ、すなわち大きな機をお居間に組み立てさせて、織りつづけた、こまかい糸で幅広の大きな布を、して我々に言うようには、く求婚なさる若殿がた、もうはやとうといオデュッセウスが歿ったうえは、私との結婚にまあお急き立ちでもあろうけれど、も少しお待ちを、この布地をすっかり織り上げるまで。紡いだ糸がむだにならぬよう、それにラーエルテースさまの経殯衣ですから。いつかは鋭い痛みを持つ呪わしい死の運命にとらわれなさる、その時のため。この郷じゅうの、アカイア女に非難されては困りますもの、身上もたんとお持ちでしたに、

(85-107)-2

ホメーロス『オデュッセイアー(上)』呉茂一訳、岩波文庫、1971年、p.44

身に巻く殯衣さえないのか、など。＞

こう言うもので、私らとても昂ぶる思いをようやくに説得された。かようにして以後、母上は日中大きな織布を織りつづけてから、夜毎にそれを解きほぐしたのだ、灯火が傍にともる時分に。こうして三年は、狡いたくみで人目をごまかし、アカイア人を納得させて来はしたが、四年目となり、季節が巡って来たときに、そのときついに、侍女たちの一人が告げた、確と知っていた女が。

『オデュッセイア』第二巻 85～107

ホメーロス『オデュッセイア（上）』呉茂一訳、岩波文庫、1971年、p.44

「私の母の求婚者たちよ、心驕って、さんざ非道をおはかりだが、現在はまあ食事なりしてたがいに楽しむことにしましょう、だが叫び立てるのは止めて貰いたい、今この謡いを傾聴するのは、いかほどにかありがたいこと、ここにおいで
の伶人は、いかにも立派な、神々ともならぶ方ゆえ。それで明日は朝早くから、集会場へ出かけ、坐るとしましょう、ひとり残らず。そこで私は皆さん方に遠慮せず、きっぱりここから立ち去るように宣言しようと思ってるのです、よそで宴も、心配したが宜しいでしょう、家から家へ移動して、自分の身上をへつっていくよう。」

(368～308)-1

ホメーロス『オデュッセイアー(上)』呉茂一訳、岩波文庫、1971年、p.33

だが万一にも、皆さんとも、こうしてゆくのが気楽でまた結構なことと考えるなら、——つまり一人の男の身代を、償いもせず、なくしていくのを、——それならへつっていった方がいい。私も永遠においでの神々を呼び訴えましょうよ、いつかはゼウスが報復の業を成就させて下さるようと。その時にはこの屋敷内で、償いなしに、身を果されることでしょうから。」

『オデュッセイア』第一巻 368～380

ホメーロス『オデュッセイア（上）』呉茂一訳、岩波文庫、1971年、p.33

「アンティノオスよ、いかにも私が、あれこれ言うのを憤ろしくお思いだろうが、それでも私は、ゼウス神さえお許容なら、そうなることを望んでるのです。それとも世間で全くこの地位が、下らぬものに成り下ったとでもお言いですか。けだし領主であることは、詰らぬものではありません、すなわち家は富み栄えて、その人自体もいっそう世間の尊敬を受けましょうから。さりながら、他にも多勢、ぐるりに海をめぐらす、このイタケーにはアカイア人の土地持ちもおいでのこと、若い方にも年寄りにも。

(389～398)-1

ホメーロス『オデュッセイアー(上)』呉茂一訳、岩波文庫、1971年、p.34

そのうちの誰なりかが、この地位を獲られもしましょう、オデュッセウスが死んだからは。でも私としては、自分らの家屋敷やまた奴婢らの主としてやっていきましょう、とうといオデュッセウスがかち獲てくれた者どもゆえ。」

『オデュッセイア』第一巻 389～398

また母上とて、お気持が二手に別れ、心中に迷っておいでだ、あるいはこの儘私の傍に踏み止まって、屋敷の世話をつづけていこうか、夫の閨と、国中の人の噂さを大切と遠慮してから。

それとももはや、求婚してくるアカイア族ちゅう、屋敷のうちにいちばん立派な人物でまたたくさん結納もくれる男について去こうかと。

『オデュッセイア』第十六巻 73～77

ホメーロス『オデュッセイア（下）』呉茂一訳、岩波文庫、1972年、p.106

というのも、ドゥーリキオンとかサメーとか、森が多いザキュントスとか言う近くの島々に威権を振う豪族たちの、おおよそ、またあるいはこの岩山に富むイタケー島を、わがもの顔に振舞う者ども、その悉くが私の母に求婚して、うちの家財を蕩尽していく、ところが母は、この忌わしい結婚話を拒絶もせねば、また結着をつけもできない、それで彼らはどんどんとわたしの家財を食い減らしていくばかりか全くすぐにも、私自身まで破滅に陥し入れかねません。しかしもちろん、その成り行きは神々の、ご所存一つにあることなので。

『オデュッセイア』第十六巻 122～129

ホメーロス『オデュッセイア（下）』呉茂一訳、岩波文庫、1972年、pp.108-109

だが今一つ言っておくこと、それをよろしく胸に蔵めて忘れるなよ。

もし本当にお前が私の子で、われらが血筋の者であるなら、それならば、けしてオデュッセウスが家に帰っていることを誰にも洩らすな、たとえばラーエルテースどのにも報せず、また豚飼にも、召使たちの誰一人にも、ペーネロペイア自身にも知らすでない。

ただお前と私と、二人きりで、女たちの心掛けを探るとしようよ、また召使いの男どもの、誰彼をなお吟味していこう、いったい誰がわれわれ二人を大切に思い、心中に恐れているか、また誰々が蔑にし、これほど立派(に成人した)お前を敬わないかを。」

『オデュッセイア』第十六巻 299～307

ホメーロス『オデュッセイア（下）』呉茂一訳、岩波文庫、1972年、p.119

オデュッセウスが出たきり長らく帰って来ぬので、私たちはその奥方に求婚したのです。すると彼女は、婚儀をいやがり拒むのでもなく、さりとして片を付けようともせず、死の暗い運命を胸に企んでよこし、こうした狡い企らみごとを、またもや慮りめぐらしたのです。すなわち大きな織機を屋敷のうちにしつらえ、織りつづけたので、——こまかい糸の、幅広な大きな布を。して私らにいきなり言うように私に求婚なさる若殿がた、もうはや尊いオデュッセウスが死んだうえは、私との結婚にまあお急ぎ立ちでもあろうけれど、も少しお待ちを、この布地をすっかり織りあげるまで。〉

『オデュッセイア』第二十四巻 125～133

ホメーロス『オデュッセイア（下）』呉茂一訳、岩波文庫、1972年、p.344

こうして三年は、狡いたくみで人目をごまかしアカイア人ら
を納得させて来はしたが、

『オデュッセイア』第二十四巻 141

その一方で、とても狡こい謀計をめぐらし、奥方に指図をして、求婚者どもへ向け大弓と、灰色をした鉄(の斧)とを置かせたのです、私たちに恐ろしい死の運命をもたらす競技の的とも、殺戮の始めともして。ところが私たちのうち一人とて、この強弓に弦を張りはおおせなかった、とても力がおよぶどころでなかったのです。

『オデュッセイア』第二十四巻 167～171

だがその男も応分の報いを受け殺された、からにはどうか
あなた自身の国の武士らは赦してくれ、さすれば我らも後
で国中から取り集め、この屋敷うちでこれまでさんざ飲んだり
食ったりした分すべてを、各自が牛二十匹の代をそれぞれ
補償として、集めて持って来るとしよう、また青銅や黄金
も、あなたの心が和むまで提供しましょうから。それ迄はま
あ、どう立腹なさろうともっともだが。」

『オデュッセイア』第二十二巻 54～59

「エウリュマコスよ、たとえお前が、親代々の財産をみな、現在手許にあるものへ、またどこからか獲て来た他のをたし
て出そうと、それにしてもまだ、けして私は殺戮の手を休め
るつもりはないだろうよ、求婚者どもが、非道な所業のすべ
てを償いきらないうちは。

さあ今こそ、お前らが面と対って戦うか、それとも逃げていく
かを、選ぶときだ、誰にしろ、もし死と凶運とを避けられよう
と思うならば。だがな、一人とて、峻しい破滅を免れられよう
者はいまいぞ。」

『オデュッセイア』第二十二巻 61～67

ホメーロス『オデュッセイア（下）』呉茂一訳、岩波文庫、1972年、p.286

「ほんにまったくオデュッセウスさまだわね、愛しい、若の、私としたことが前には解らなかった、殿さまへすっかりじかに手を触れるまで。」

こう言って、両眼でペーネロペイアの方を見やった、それは、愛しい夫君が、うちにおいでなさるのを報せようと思って、ではあったが、奥方のほうは、面と向かって眺めることも、気がつきさえもできなかった、アテーナーさまが他へ心を向けさせたので。またオデュッセウスは手を延ばして捉えにかかり、右手で(乳母の)喉元を抑えつけた、そして左手で、自身の傍へ引き寄せると、声をかけ言うようには、

『オデュッセイア』第十九巻 474～481

ホメーロス『オデュッセイア(下)』呉茂一訳、岩波文庫、1972年、pp.222-223

「わたしの娘よ、なぜにそなたは、そんなことを私に向かって問い訊ねるのか、そもそもこうした方策を考え出した張本人は、そなたではないか、すなわち彼ら求婚者どもに、オデュッセウスが帰国してから復讐させると。そなたの望むとおりにするが宜しかろう、だがな、どうしたならば道に適うか、言っておこう、すなわちとうといオデュッセウスが、求婚者どもを罰したうえは、たがいに固い誓いを交わして、彼のほうはゆく末永く王位を保ち、一方町の者どもは、子弟の誅殺されたのを忘れるように、われわれとして仕向けることが宜いであろう。してみなみな旧のとおりに親しみあい、富と平和を、ゆく末永くゆたかに享受させるとしよう。」

『オデュッセイア』第二十四巻 478～486

ホメーロス『オデュッセイア（下）』呉茂一訳、岩波文庫、1972年、pp.364-365

















